

# 再生の物語 —— 『二番草』 論考 ——

山 本 省

## 1. この作品の位置づけ

『二番草』は、『丘』（1929年）や『ポーミュニューの男』（1929年）に続いて1930年に発表された。これら3つの物語をジオノは「牧神3部作」<sup>1</sup>と名づけている。

小さな村の消滅とその復活という問題が扱われている。この物語が書かれた当時、フランスではすでに小さな村が消えていくという徴候が各地にあらわれていた。それは現在でも相変わらず深刻になっているきわめて現代的な問題である。事実、リユール山麓にはそうした廃村が点在しているのである。衛生状態が悪かった昔は、伝染病の蔓延も廃村の大きな原因になっていた。

日本ではこの問題はいっそう深刻である。ここ10年間で、町村合併などにより約2千の村が消滅した（2006年5月1日現在）。若者が都会に出ていってしまった山奥の村は、かろうじて存続しているだけである。村民のほとんどが高齢者である。間もなく消滅していく運命が待ち受けている村も数多くある。最後の村人が死ぬか離村すれば、それと同時に村と、その村が背負ってきた歴史（文化）が死滅してしまうことになる。

村民たちが見捨ててしまった村でひとりだけ暮らしている主人公。生きる喜びもななくただ黙々と生活しているだけだったこの男が、格好の伴侶に恵まれるという幸運に遭遇し、生きる意欲を蘇らせていく。あらゆることに前向きに取り組むようになる。そして、生きがいと誇りをもって農業に精出す。彼の仕事の結果（素晴らしい小麦）が新しい仲間を廃村同然の村に引き寄せる。3人の子供のある家族が彼らのそばに引っ越してくる。彼らにも間もなく二世が生まれるであろう。

『二番草』は、ひと組の男女の生活が充実するとともに村が蘇生し、やがてその村が別の家族を招き寄せることにより、生命が満ち溢れるようになっていくという物語である。数年後、長編小説『喜びは永遠に残る』（1934年）において、この再生のテーマは大きく多彩に膨れあがり、生きがいとなるべき数々の喜びが検討されることになる。『二番草』を、ジオノの戦前の代表作とも言えるこの大作の前触れと位置づけることも可能である。同じく再生をテーマとしながら、森林の復活に焦点が当てられた作品として、人口に膾炙している『木を植えた男』（1953年）を挙げることもできる。

## 2. タイトルについて

ジオノは作品のタイトルにはかなりこだわりを持っていた。『蛇座』(Le serpent d'étoiles) や『空の重さ』(Le poids du ciel) などに熟慮のあとがうかがえる。ジオノ自身も、タイトルが決まらなないと、物語が首尾よく展開していかないと述懐している。

物語の筋に関心を抱く前に私はまずタイトルを考えだす。まさしくそのとおりなので、タイトルがまだ見つかっていないのに、物語を書きはじめたりすると、たいていの場合、そういう物語は流産に終わってしまう。私にはタイトルが必要なのです。タイトルは私たちが一定の方向に向かっていく旗印のようなもの、つまり到達しなければならない目的地なのです。書くという行為は、タイトルを説明することなのです。[中略] タイトルは目に見えます。表紙に印刷されたタイトルの活字が私にははっきり見えるのです。タイトルが見えてくると、物語を創りだす私の装置が活動をはじめます。<sup>2</sup>

事実、この物語のタイトルとして「大鎌と二番草」<sup>3</sup> や「春の風」<sup>4</sup> なども候補にあがっていた。最終的に選ばれた原題は **Regain** である。『ロワイヤル仏和中辞典』(旺文社) から **Regain** の項目を引用してみよう。

1. 回復、よみがえり、再来。regain de vitalité 活力の回復。jouir d'un regain de vogue 人気を盛り返す。2. 二番草、二番刈り。faucher le regain 二番草を刈る。

男(パンチュール)と女(アルスユール)の出会いを契機にした人間らしい暮らしの復活、村(廃村寸前の村)の再生、獲物の不安定な狩猟から安定した収穫が期待できる農耕への転換、こうした要素がないまぜになっている物語である。タイトルの **Regain** は「再生」と訳することもできるし、「二番草」と訳してもいい。ここでは、いったん繁茂した牧草が刈り取られたあと、ふたたびある程度まで成長する牧草が刈り取られるというような意味がこの物語に込められていると解釈し、「二番草」と訳する。最初に刈り取られる牧草とは、物語が始まるずっと以前に栄えていたはずの村である。廃墟同然になってしまっていたが、何とか復活する村が二番草に例えられている。農業の色合を出すためにも、「二番草」の方がいいと筆者は判断する。小麦の生産だけではなく、「二番草」という言葉は牧羊をも想像させてくれるからである。

### 3. 物語の構成

御車のミシェルが操縦する馬車の牧歌的な雰囲気では物語は開始する。さまざまな人物が利用する馬車には種々の情報が集まってくる。彼らの会話を通して読者はこの地方に対する認識を深めていくことになる。多彩なニュースから、ごく自然にもっとも重要な再生のテーマへと次第に焦点が絞られていく。とりあえず、雰囲気を感じ取っていただくために、冒頭部分を紹介しよう。乗客たちのなごやかな様子が浮き彫りにされている。

バノンに向かう郵便馬車がヴァシェールを通りかかるのは、いつでも正午頃である。

なじみの客がやって来るのを待ったためにマノスクを遅く出発するような日でも、ヴァシェールに着くのはいつでも正午である。

大時計のように規則正しく正午なのだ。

毎日同じ時刻に着くのは、じつのところ、かなり大儀なことである。

乗合馬車を操縦するミシェルは、ある日、ルヴェスト＝デ＝ブルッスの四辻で停車し、カフェ〈二匹の猿〉を切り盛りしているファネット・シャバスユとおしゃべりをしてから、のんびりと出発してみた。それでも何のききめもなかった。ミシェルはどうなるか試してみたかったのだ。だけど、駄目だということがよく分かった！

オピタルの曲がり角を通り過ぎるとすぐに、森林の上に聳えている花のような青い鐘楼が見えてくる。しばらくすると、雄山羊の鐘のような音で、鐘楼の鐘がお告げの時を響かせる。

「やっぱり十二時だ」とミシェルは言う。ついで、馬車の客室の方にかがみこんで声をかける。

「なかでも聞こえましたか？やっぱり十二時です。何をしても駄目ですわ」

そこで、みんなは座席の下から籠を取り出し、食事にする。

ガラス戸を叩く者がある。

「ミシェル、この美味しいアンドゥイエット〔豚や牛の内臓を詰めた小型のソーセージ〕を食べてみないか？」(323)<sup>5</sup>

馬車のなかから見える廃墟になりそうな村の様子を、ある乗客が次のように描写する。このアガタンジュというカフェの店主は、今では平地に移住しているが、かつてはオービニャーヌの住人だったのである。

「オート＝テール（高地）の住人から聞いたところでは、まだ三人住んでいるそう。まずゴーベール。例の〈セキレイ〉だよ。レ・ルヴィエールで監視人をやっているゴーベールの親父だ。奴は俺よりも歳をとっている。そしてパンチュールがいる。奴は……。さらに、ピエモンテ出身だという評判の女もいるので、これで合計三人ということになる」(326)

この3人が重要な人物である。パンチュールは村を復興させる人物となるし、そのパンチュールのために女房を探し出してくるのはマメッシュであり、小麦畑を耕作するための重要な道具である犁を譲ってくれるのが鍛冶屋のゴーベールなのである。

パンチュールの住んでいる村の方向に、研ぎ師のジェデミュスとアルスユールの荷車が近づいていく。彼らの荷車を巧みに誘導していくのはオービニャーヌの3人の住人のうちのひとり、老婆のマメッシュである。草原のなかをさまざまな獣たちが動き

まわり時には交差するように、乗合馬車と荷車が人と人の出会いを可能にしていくのである。

さらに、種々雑多な噂話が紹介されることにより、物語の基礎が準備されていく。つまり、マメッシュの来歴の説明と、パンチュルルの妻になるはずのアルスールの過去が明らかにされる。物語の大筋とは関係のないような挿話も、この地方の特徴を知るための貴重な情報源となっている。

ピエモンテ出身のマメッシュの夫は、地元の井戸掘り職人が地盤が砂地で危険なので降りていけないという井戸の掘削を引き受ける。手持ちの金がなく、マメッシュが臨月を迎えている状況にあって、彼は仕事を引き受けざるをえない立場に置かれていたからである。その結果、柔らかな地盤が崩れ、彼はその井戸のなかに埋まってしまったという話 (327)。さらに、そのあと生まれた子どもが毒人参を口にして死んでしまったという話 (328) が続く。こうしたイタリアのピエモンテ出身の移民はジオノの作品にたびたび登場する (ジオノの祖父はピエモンテ出身であった)。さらに、マドモワゼル・イレヌという名前で、トニーという男について来て、即席に作られたカフェのステージで歌を歌ったアルスールが、そのあとひとり村にとどまり、男たちのなぐさみものになったという挿話 (349-351)。今では、研ぎ師ジェデミュスに拾われた彼女は、その地方の村々を訪ねまわって、研ぎ師の手伝いをして暮らしている。

さらに秋の物産市の時期、事もあろうかその忙しい稼ぎ時にアガタンジュのカフェで死者 (ジョゼフ) がでてしまった。葬式を出せば、カフェの稼ぎがなくなってしまう。狼狽しながらも、店を開けておくよううまく手配する店主たちの様子がユーモラスに描写される (401, 405-406)。ヴァリグラヌはこう助言したと言う。「忙しい日にカフェを閉めるには及ばない。棺桶は裏から入れ、死体を収め、裏から出せばいいんだ。家の前から、そんなものは何も見えないよ。そうじゃないかい？」 (401)

馬車のなかで交わされるこうした情報のなかから、パンチュルルとアルスールの物語がごく自然に表面に浮き出てきて、この物語の核心部分を占めるようになっていく。さまざまな挿話が彼らの物語へと収斂していくとすることができるのである。

馬の慧眼を強調するためであろう。馬車を引く馬が、いつの間にか、再生しつつあるオービニャヌの変わりように目をみはるようになっていくという記述がある。

左の馬は、森に穴を穿っている谷間の方に頭を向けている。その馬は<sup>きこう</sup>髻甲を揺り動かし、首を長く伸ばし、谷底に向かっていなくなっている。

「ああ！またあいつの癖がはじまった。楽しませてやろうじゃないか。どういう風にしてあんな癖がついてしまったか、あなたには分からんだろう？はじめはたしか五月のことだったなあ……。ここから、オービニャヌの丘が見えるのは分かるだろう。ほら、あそこだよ。こんな調子で坂を上っていた。あいつが歌いはじめたんだ。そのときはそれほど気にもしなかった。次の日も、また次の日も、ずっと、同じ場所で同じことが起こるんだ。しかも、あいつはいつも頭を同じところに向ける。『あそこにいったい何があるんだろうか？』こう思って、俺は見つ

める。向こうのオービニャーヌは、普段はトウモロコシのように赤茶けているんだが、青物で青くなっていた。深々と美しい植物が生えているんだ。あの馬はそれを見ていたんだ」

「そんなことに気がついていたとは……」

「そうなんだよ」

さて、彼らは高原に登りついた。馬たちは速歩を取り戻す。大気の暑さも控えめになる。

「ほら、見えるだろう。どこでもこんな風なんだ」とミシェルは言う。

草のあいだに見える切り株ともぐら塚のような麦藁の堆積を、彼は鞭で差し示した。(403)

物語の冒頭で、マノスクを出発する馬車はいつも正午にヴァシェールに到着するというエピソードがあったが、この挿話はそれと対をなしているように思われる。かつて荒れ果てていたオービニャーヌは、いまでは「深々と美しい植物が生えている」のである。御者や乗客たちはヴァシェールの青い鐘楼を正午に眺めるのが習慣になっていたが、馬はもっと重要な現象である、村の復活、植物のよみがえりにいち早く注目しているのである。

人間たちの営みは、馬車の乗客の噂話や荷車の向かう方向というような、偶然とも形容できるような出来事によって大きく左右されているというのが、この物語の構成を支えている考えである。物語の筋の運びに自由を与えているところに、作者ジオノの力量の冴えがうかがえる。

#### 4. 2人の主人公

この物語の舞台を提供しているオート＝プロヴァンスのリュール山麓は、ジオノが格別の愛着を抱いていた地方で、『丘』や『喜びは永遠に残る』をはじめとするいくつもの作品のなかでも利用されている。廃村寸前のオービニャーヌという村の描写を試みよう。

オービニャーヌは高原の突き出たところにまるで雀蜂の小さな巣のように貼りついている。そして、そこにはもう三人しか住んでいないというのは、事実である。村の下に向かって、草も生えていない斜面が流れ落ちていく。ほぼ底にあたるところに、いくらかの柔らかい土と、こわばった毛が生えているような貧弱な柳の林がある。その下は狭い谷で、水が少し流れている。高原のちょうど端っこに建てられた数軒の家は今にも崩れ落ちそうである。斜面を土砂が崩れはじめたとき、村の中央に鐘楼が杭のように打ちこまれたので、村は何とかそこに繋ぎ止められている。村全体がつなぎとめられているというわけではない。村から引き剥がされているような家が一軒ある。それは、上から下へとごく自然に流れ、流れの岸辺で四本の足を踏ん張って立ち止まっているといった感じの家である。そ

こは流れが合流するところで、人びとが街道と呼んでいる場所である。そのかたわらに糸杉が聳えている。

それがパンチュルルの家だ。(329)

バノンからル・コンタドゥールに向かっていくと、ほぼ半分ばかり進んだところに右側に入りこんでいく脇道がある。その小径を一キロほど進むと廃墟に行き当たる。このルドルチェの廃墟がオービニャーヌのモデルだというのが定説である。『木を植えた男』冒頭の廃村も同じく「雀蜂の巣」と形容される<sup>6</sup>が、両者は同じ村をモデルにしているのである。

この物語のオービニャーヌは『木を植えた男』の廃村とは、水の有無という点が異なっている。つまりオービニャーヌにはわずかながら水が流れているのである。水は生命を育む。この流れはのちにパンチュルルがアルスュールと出会うときに絶大な役割を果たすことになる。水の流れはパンチュルル再生のきっかけを作り出すのである。そのことはのちほど検討する。

さて、この物語の主人公パンチュルルは樹木を思わせるような人物として登場する。樹木は水とともに生命の象徴である。しかし、物語に登場したばかりのパンチュルルは生命を繁茂させるに足るだけの器量をまだ持ち合わせていない。

パンチュルルは巨大な男である。まるで樹木が歩いているようだ。真夏に、無花果の葉で作った日よけをかぶり、両手で草を抱えた彼が立ち上がり、土地の様子を見ようとして両腕を広げると、彼はまさしく樹木である。ぼろぼろのシャツはまるで皮のように垂れ下がっている。不恰好で分厚く大きな唇は赤いピーマンのようだ。何であろうとつかもうとする物に向かって彼はゆっくりと手を伸ばす。普通、彼がつかもうとする物は動いていないか、もう動いていない。それは果物であり、草であり、あるいは死んだ獣である。彼には時間がたっぷりある。そして、何かをいったんつかむと、彼はしっかりとつかむ。(329-330)

樹木の生まれ変わりのような人間としてパンチュルルは構想されている。この樹木がしかるべき伴侶を得て精彩を取り戻すことにより、樹木にそなわっているような生命が横溢していく。ただし、この部分では、パンチュルルはまだまだ鈍重な男でしかない。

パンチュルルの伴侶になるはずのアルスュールは、空間的には彼と遠く隔たったところで暮らしていたのだが、マメッシュに誘導された結果、パンチュルルの家の前まできている。

家の前には柔らかい緑色の草が生えている。糸杉がある。意図的にそうしていると思えるほど耳に心地よく優しい声でその糸杉は歌っている。さらに屋根瓦の

下に巣を作っている蜜蜂が空中で唸っている。その上、とても信じられないような光景なので、彼らは目をこすった。まるで奇跡のように、ごく小さなリラの木に花が咲いているのだった。

「休もう、アルスユール。休もうぜ」

ジェデミュスは地面に横たわり、犬のように伸びをする。

「もう眠ってしまいそうだ」

いや、彼女の方は眠れないだろう。すべてを押し流してしまう水のような、ある欲求が彼女の内部に住みついているからである。彼女の心は溶解していく土塊のようだ。草のなかに彼女は坐っている。両脚のあいだに雛菊が数本生えている。彼女は今では空っぽの皮膚でしかない。自分の奥底で火のように激しい水が歌っているのが彼女には聞こえてくる。

彼女は胴着を開き、乳房を出してみる。乳房は堅くて熱い。それぞれの手で乳房に触れる。

そのとき、戸口の白い敷居の上に、彼女は濃厚な血痕を認めた。まるで牡丹のようだった。(363-364)

彼女は自分の身体が燃焼するのを欲しているが、彼女の連れは老人の刃物の研ぎ師であり、彼女の恋愛の対象とはほど遠い。オービニャーヌの3人の住人のひとりマメッシュが、それと気づかれぬようにこの2人を自分の村へと誘導してきた結果、2人の主人公が遭遇できるようになる。しかし、家の前までやって来たアルスユールとジェデミュスの前に、パンチュールが堂々と自分の姿を見せることはない。思わず家のなかに隠れてしまうのである。そのあと、滝の上に張り出した木の枝に登って、下流にいる彼らの様子をうかがっていたパンチュールは、滝に転落し、気を失う。

そのとき、突如、その枝は長い呻き声を発して、ぐらっとかしいだ。動物的な本能で腰をひねり、上にある別の枝の方に彼は両手を伸ばす。しかし、その枝はまるで飛び立つように逃げていく。そして彼は落下した。

彼は背中に冷たい手のきつい平手打ちを食らう。小川の長くて白い指が自分の上で閉じられていくのが見える。

すぐさま、水は身をおかし、濃厚ですべすべした身体で彼を包みこむ。彼は水を脚や腕で押し返す。水は彼の胴にからみつき、鼻を押さえつけ、両肩を川底の平らな石に押しつける。

背中を弓なりにし、腕を素早く動かし、魚のような身のこなしで、彼は跳び上がる。石のように硬い大気塊に彼の口はぶつかる。空気をたっぷり飲みこんだため、身体のなかは一杯になる。彼もまた水の肩の上にのしかかる。岸边に向かって抜き手を切る。指を土のなかに突き立てる。土は腐っており、彼の拳の下でへこむ。その闘いの周辺で、水はイグサのきれっぱしと交じり合って飛び散る。

彼の腰のまわりを水がしっかりつかまえる。一挙に小川は彼を引き抜き、運び、滝の流れ口の向こうに放り投げる。

一番目の階段の上に、まるで蟄蛙のように腹ばいになった状態で投げ出された彼は、すぐさま闘いを再開した。だが、実際のところは、鳥もちにからみつかれているように、ただ両腕と両脚を弱々しく動かしているだけのことだった。滝の流れは自分の両腕と両脚を、倍増した泡の怒りも動員して、激しく動かしていた。

(374)

このパンチュルル落下の場面が前半と後半の蝶番のような役割を果たしている。気を失い、流れを漂っているところをアルスユールに岸边に引き上げられ、息を吹き返したパンチュルルはいわば再生したのである。新たな活力がパンチュルルの内部から湧き出てくる。それは気絶しているパンチュルルを流れから引き上げ、彼を介抱してくれたアルスユールのおかげである。

彼女は月光を浴びている。彼には彼女の姿がよく見える。大きな蕪のように青白く尖っている顔には、顎がほとんどない。艶やかで石のような長い鼻。丸く滑らかでつやつやしたスモモのような目。笑うと二本の犬歯がのぞく腫れぼったい唇。最高に美しい女だ！

「君はとても優しいよ」とパンチュルルは言う。「それじゃ、君が俺を草の上まで引き上げてくれたのかい？」

口のなかに残っている砂利と水の味を厄介払いするため、彼は唾を吐いた。

彼女は草のなかを両膝でパンチュルルの近くまでにじり寄ってくる。

[中略]

「私にはすぐさま事態が飲みこめた。相棒にもう一度『男よ！』と言ったのよ。

それはちょうどあなたが大跳躍をやったときのことで、私たちにはあなたの姿がよく見えたわ。流れのなかを長くなって落ちてきたのよ。そこで私たちは走っていった。すっかりこわばったあなたは大きな魚のように水のなかを流れていた。そして何かのはずみであなたは岸边に流れてきた。それで相棒と私が草の上に引き上げたのよ。あなたはすぐに水を吐き出したわ。相棒は私に言った。『死んではないぞ。意識が戻るだろう』しばらく待ってみたわ。だけど意識は戻らなかった。そこで相棒は言った。『暗くなってきたので、寝よう。ここで寝ようと向こうで寝ようと変わりはない。ただ、滝の近くはまるで雨が降っているように湿っているのよ。滝からは離れた方がよさそうだな』それでここまでやって来たってわけよ。草の上まであなたを引っ張りあげたのよ。あなたは重いし、相棒は年寄りだし、私は何と言っても女だし、大変だったわ。見てよ。まだ草の上を引きずったあとが残っているでしょう」(376-377)

この事件をきっかけにして、パンチュルルとアルスユールは夫婦として暮らしはじめる。パンチュルルひとりではとても実現できなかったことが、今では可能になってきている。微妙な精神の化学反応のおかげで、喜びに対する積極的な姿勢が生じてきたからである。狩猟を暮らしの糧にしてきたパンチュルルは、アルスユールの意見を



受け入れ、小麦作りへと生活を転換していく。獲物が取れるか否かは偶然に大きく左右されるが、農耕生活の方が比較にならないほど安定しているからである。農作業を開始するにあたり大きな意義を担うようになって浮上してくるのが、かつてオービニャーヌに鍛冶屋として住んでいたが、今では平原に家を持っている息子と同居しているゴーベールが作った犁である。

## 5. 犁が要石 (clef de voûte) になっている。

物語の転回点はパンチュルルの滝下りにあるということはすでに述べたが、物語の鍵になっているのはゴーベールの犁である。この犁が、パンチュルルをその日暮らしの狩猟から、農耕の民への変貌を助けることになる。作者ジオノは犁の青い刃の美しさに感動し、犁を主題にした物語を書こうと意図したのだった。この間の経緯をジオノ自身が語っている。

ジオノ：そうです。お分かりですね。犁の刃ですよ。テオクリトスの時代のウェルギリウス風の農作業を見たときから、犁の刃は私にとって並外れて好ましい物体になりました。子供の頃、知らないうちに犁の刃の斜面を撫でている自分に気がついたりしました。あなた方がそんなことをされたかどうかは知りませんが、そうしてみると独特の感じが得られます。きわめて官能的な印象なのです。大地に磨かれてきた鋼鉄は、肉のようなものを帯びてくるのです。その肉は、大理石の肉、あるいは、ほとんど、非常に美しい動物の肉に似ているのです。非常に美しい人間とまでは言いませんが、非常に美しい動物と言っておきましょう。

アムルッシュ：『二番草』のなかで、ゴーベールが鍛錬した犁の刃をあなたが描写される時、そういうことが読者にはよく感じられます。

ジオノ：そうです。『二番草』です。まさしく、私はあなた方にあのことを話そうとしていたのです。子どもながら、私が犁の刃に対して覚えた感動をあなた方に話したのはちょうどそのためでした。そうした感動に即座に震撼させられました。さらにその記憶が並外れて明瞭に残っているのです。私が書きはじめたときは、当然のことながらそうした記憶を頼りに、イメージを創ろうとしたり、イメージとイメージとの関わりを創りあげようとしていたのです。子どものときの記憶を活用したのです。だから、私の初期の本のなかには、無輪犁や、あのテオクリトスの理論や、そこで登場するような人物たちや、白いナプキンと食料を満載した籠を持って畑に出かけるウェルギリウス風の農民たちや、ききわけのいい子どもが学校に出かける時の家庭の様子などが描写されているのです。<sup>7</sup>

さて、鍛冶屋のゴーベールにとっては鉄床が何よりも大事だった。鍛冶屋のゴーベールの仕事振りは次のように描写される。

ゴーベールは最高の犁を作ることができた。それは彼の天命だった。糸杉の下に掘られた穴には水が一杯たまっていて、その水は羊の胆汁のように苦かった。水が糸杉の根のなかから染み出てきたからであろう。彼が犁作りに取りかかるときはまず、切り取ってきたトネリコの大きな材木をその穴のなかに漬けるのであった。かなりのあいだ、昼も夜も、トネリコはそこに漬けたままにしておき、ときおりパイプをふかしながら彼は漬かり具合を調べにいった。彼はトネリコ材をまわし、手で触り、ふたたび水のなかに入れる。そうしてトネリコに水を存分に染みこませる。両手でトネリコを洗ったりすることもある。何もしないでただ眺めるだけといったこともある。金色に輝く太陽がトネリコの木片の周りを泳ぐ。彼が鍛冶場に戻ると、ズボンの膝は草を押しつぶしたためにすっかり緑色に染まっている。そしてある日、トネリコは出来上がっている。彼はその梁を取り出し、まるでつい先ほど海から釣りあげられたかのように水がぼたぼたと滴り落ちるその梁を肩にかついでいく。ついで、彼は鍛冶場の前に坐り、木材を膝の上に置く。両側で少しずつ圧力を加えていく。彼がそのトネリコを徐々に捻じ曲げていくと、木材は膝の形をとっていく。ところで、彼がこうやって作る犁こそ、耕作者たちには最高の犁なんだ。犁が完成すると、みんなが見にやってくる。その犁に触れ、いろいろと意見を言い、ゴーベールに訊ねる。

「ゴーベール、これはいくらだね？」

鉄床から手桶へと飛び移るのを中断した彼は言うのだった。

「売約済みだよ」(330-331)

靴職人の父と洗濯業を営む母を両親に持っていたジオノは、生涯にわたり職人の仕事に心からの共感を抱いていた。毎日同じような作業を繰り返しながらも、多少なりとも向上することを願い、改良のための工夫を考え続けていく職人の仕事に、自分の作家稼業のイメージを重ね合わせていた。作家が原稿を書く紙やインクやペンを大切にするように、鍛冶屋は鉄床やハンマーを大切に扱う。青白く光る鋭利な犁の刃の存在感に心から感嘆したジオノは、その犁の刃の「歌」とでも形容できるような物語を書こうと意気込んだのであった。

このゴーベールも老齢には勝てず、やむなく息子の家に引き取られていくが、彼が大事そうに携えていったのは重い鉄床であった。鉄床は鍛冶屋の命なのである。農耕を開始するにあたり、パンチュールはまず隣人アムルーを訪れ、3百キロの小麦と馬を貸してほしいと頼む。その要求は快く聞き入れられる。ついでゴーベールを訪れ、小麦を作りたくなったので、ぜひとも犁がほしいのだと告げる。この場面のやりとりを引用してみよう。

「だけど、お前らしくないな」とゴーベールは言う。「お前はむしろ狩人じゃないか。サーベルの方が似合うように思うな」

「狩りはある日はよくても別の日はよくないというように、頼りにならない。つ

まり、まともな仕事じゃない。それに肉だけだ。丘の向こうに土地を見つけたが、あそこは土が深くて肥えているようなんだ。あそこで小麦を作りたいと思うようになったというわけだよ」

「今頃になってそんな風に思うなんて奇妙だな」

「俺はもうひとりじゃないからだよ。俺には女房がいるんだ。夫婦が狩りだけで暮らしていくわけにはいかない。女房がやって来てから、俺にはパンがいるようになった。女房だってパンがいる。それに……」

「それはまっとうな考えだし、よい兆候だ」(392-393)

農耕の意義を説明するパンチュルルに同意し、ゴーベールは彼に犁の刃を与える。その刃の描写。

たしかにそれは犁の刃である。ナイフのように裸の刃だ。頑固で鋭く傲慢な刃で、その側面は丘を走り抜ける動物のわき腹のようにくぼんでいる。皺ひとつない美しい皮膚。拳に乗せたら、平衡を保つだろう。(394)

犁は刃だけでは使いものにならないので、ゴーベールはオービニャーヌの鍛冶場に残してきた木製の柄のありかを教える(394-395参照)。ゴーベールには自分が作った犁がパンチュルルの手を借りて活躍する様子が想像できる。刃と柄の取り付け方を教えたあと、もう身動きさえ自由にならない自分ではあるが、自分が作った犁が畑を起こし、小麦を作っていく様子を楽しく空想する。

ゴーベールはじっと椅子に坐ったまま、死んだ両手を杖の上で交差させ、動かない。顔で何かを知らせようと努力する。

「俺たちの土地は小麦を産み出すだろう。俺の言うことを信じてくれ。あの土地には小麦が豊かに実るはずだ。俺が若い頃は小麦の産地として名が通っていたんだから。

逞しい男がそこで力を出せば、小麦が祝福してくれるだろうよ……」(395)

こうして、パンチュルルの農民としての生活が首尾よくはじまった。二番草が勢いよく芽を出してきたわけである。このあとこの物語は佳境にはいっていく。

こうして、いよいよ幕が上がる。

印になるようにわざと残しておいた茂みまで、彼はまっすぐ線を引くだろう。それが中心の畝になる。他の畝はそれと平行して伸ばしていく。そして、ここから向こうの若いヒマラヤスギにいたるまでくまなく畝に覆われて、その畑が瓦屋根のように見えたなら、しめたものだ。それ、前進だ！

犁の鋭い刃を土のなかに急激に打ちこむのに、動物を殺す獵師の本能が役立った。大地は呻いた。大地は譲歩した。鋼鉄が土を切り裂くと、黒く肥沃な土が盛

り上がった。そして、犁をひと押しするたびに、大地はもとの姿をとろうとした。大地は戦った。噛み付き、防衛しようとしているようだ。馬の顎からパンチュルルの両肩にいたるまで、すべてが揺さぶられた。すぐさま彼は鋤の刃を調べてみた。傷はついていなかった。しかしながら、厄介な石にぶち当たったのだ。

「それでも、乗り切るんだ」歯を噛み締めてパンチュルルは言った。

今では、舟の舳先に似た大きな刃物が大地を鎮圧しながら航行していく。

「さあ、ネーグルよ、もう少し引っ張るんだ。怠けるなよ」

耕作は快調に易々と進んでいく。そうすると、太陽が丘を飛び越え、昇ってきた。さらに、アルスジュールが小川を飛び越え、上がってきた。(399-400)

収穫は上々であった。その地方では小麦が不作の年だったにもかかわらず、物産市はそれなりのにぎわいを見せている。一箇所だけひととき異彩を放っている小麦があった。もちろん、それはパンチュルルの小麦である。6袋あった。犁の刃の描写に並び、この小麦の描写はこの物語のなかではきわめて重要である。パンチュルルの農民としての矜持も強調されている。

それは銃の弾丸のように重い。良質で金色である。それ以上のものは考えられないほどきれいである。籾殻ではない。穀粒以外の何物でもない。乾燥し、頑丈で、小川の水のように鮮明だ。その小麦に触れ、それが指のあいだを流れる様子を見てみたい。毎日目にできるような小麦ではない。

「触らないでほしい」男は言う。

アストリュック氏は彼の顔を見つめる。

「触らないでほしい。買うためなら、それはそれでいい。だが、見るだけなら、目で見てほしい」

買おうと思っているのだが、彼は触らない。彼には理解できる。自分だって同じように言うだろうということ。

「これはどこで取り入れたんだい？」

「オービニャーヌだ」

アストリュック氏はその美しい穀粒の方にさらに身体を傾ける。その穀粒が袋の布地を膨らませているのがよく見える。藁も埃も混じっていないことが分かる。彼は何も言わないし、誰も何も言わない。それらの袋の背後にいてそれを売ろうとしている男も無言である。言うことは何もない。それは美しい小麦であり、誰もがそのことは分かっている。

「機械で脱穀したんじゃないのかい？」

「これで脱穀した」男は言う。

彼は大きな両手を見せる。穀竿をふるったその手は傷だらけである。彼が両手を開くと、かさぶたが裂け、血が流れる。その男のかたわらには、けっこう可愛い若い女性が立っている。煉瓦のように日焼けしている。彼女は男を下から上まで見つめ、満足な表情を見せる。そして彼に言う。

「手は閉じておいてよ。血が出るじゃない」  
彼は手を握りしめる。(407-408)

## 6. 自然描写

ジオノの作品にあってはいつもそうだが、オート＝プロヴァンスの豊かな自然が作品の随所で再現されている。人間は自然を制圧するのではなく、自然と共生してはじめて豊かな生活を送ることができるということを、ジオノが確信しているからである。『世界の歌』や『喜びは永遠に残る』といった長編小説でこのことが雄弁に示されているのは言うまでもない。

作品の冒頭で乗合馬車の様子が過不足なく紹介されたあと、ジオノは読者を周囲の自然に向けていく。強調されているのは、そのあたりの土地を支配している「風」である。「風」は頻繁に（ほとんど毎頁のように）登場する。3例を紹介してみよう。

まるで羊の群れのように走りまわる十一月の風が、櫛の落ち葉を押しつぶしていた。その風はとてつもなく冷たく、申し分のない厳しい乾いた冷たさだった。ひと吹きするだけで、ありとあらゆる水源を沈黙させてしまうほどだった。森のなかでは、風の音のほかにはもう何も聞こえなかった。(325)

風が、まるで海のように空を持ち上げる。風のために、空が沸騰し黒くなる。まるで山のように空が泡立つ。もう太陽は見えない。静止した平穏な青空が見えるということもない。流れていく雲しか見えないのである。雲たちは南の方に走っていく。

時として、その風は急降下し、森林を押しつぶし、街道に飛び出す。風は埃の長い紐を編みあげる。馬たちは歩みをとめて、頭を下げる。風が通り過ぎていく。(326)

雲の向こうで風が唸っている。(327)

この風は人間を圧倒する。風は森林を押しつぶし、人間の腰を曲げ、地上にあるものすべてを吹き飛ばし、生命から水分を奪い取る。人間らしい暮らしをするには、何と言っても、まずこの風を懐柔する必要がある。

こうした殺風景な自然のなかをアルスジュールとジェデミュスが、重い砥石を載せた荷車を引きながら歩いている。彼らが村を出て、丸い丘に差しかかる光景は次のように描写されている。この直後に、マメッシュの行う一種の魔法により彼らは物語が進むべきところに誘導されていく。その直前の、期待をはらんでいる重要な描写である。

円い丘の上まで来ると、杜松（ねず）の茂みから野生の唸りが聞こえてくる。その音は小さな谷の向こう側の下の方から聞こえてくる。地面に植物は何も生えていない。その褶曲の底にポプラの老木が一本だけ生えている。突き棒を振るって先人が切り開いたにちがいない向こう側の小径を彼らは登る。草はもう見当た

らない。タイムの茂みがいくつかと、いつものように蜜蜂の訪問を受けているセージの苗木が見えるくらいである。彼らの足の下から岩ががらがらと崩れ落ちる。彼らは登り、振り返るが、村はもう見えないし、ポプラももう見えない。あと十歩が大事である。その十歩のあいだ、すべてが協力する。肩は前のめりになり、太ももは前に進み、足は弾み、頭は命令を出す、もう一歩、もう一歩だという風に。ジェデミュスも荷車を引く。十歩進んだ。そうすると、もう引き返すには遅すぎるのだ。大きな杜松の木々がうしろを塞いでしまった。彼らは前方が開けた大地のまっただなかにいる。目の前にあるのは高原である。それは本物の高原だ！  
(352-353)

このあと、向こうの方に見える何か棒のようなものに引きつけられてアルスュールは少しずつパンチュールに接近していく。ここでも「木」が重要な働きをする。自然の一要素になりきったマメッシュは魔術を行使し、アルスュールを誘導していく。夫が井戸に飲みこまれ、子どもが毒人参を食べたために土に帰っていったように、彼女も、この役割を果たしたあと、人知れず高原のなかに吸いこまれていく。

「急に動いたのよ！ちょっとだけ草の上に出てから、また低くなったのよ」

「何、急に動いたって？」

ジェデミュスはソーシッソンを手にして、じっと見つめている。

「木だわ！」

「木だって？少し頭がおかしいんじゃないか？」

「たしかに木よ。あれは今朝からずっと私には見えていたのよ。ある時はこちら側に枝をつけ、ある時は向こう側に枝をつけていた、あの黒い物体だわ。三、四回『あれは何だろう』とあんたに訊ねたら、あんたは『木だよ、歩くんだ』と言ったじゃない。まだあそこにいるわ。また急に動いた！」

「勝手に想像しているだけだ。馬鹿な女だな。木がどうして動いたりするんだ！」

「動いたわよ。多分、木じゃないわ」

「木でなかったら、この高原で、いったい何だと言うんだい？」

「分からないわよ。だけど、確かに急に動いたのよ。想像なんかじゃない。しっかり見えたんだから」

「勝手な作り話はもういいかげんにしろ」(354-355)

物産市でパンチュールが出品した見事な小麦の噂を聞いた男がひとり、パンチュールを訪ねてきた。農作業をしていたパンチュールとともに畑を眺め、ついで家のなかに入る。家具調度に視線を走らせたその訪問者は感嘆の声をあげる。彼の移住の決心は、アルスュールがふるまったスープを味わうことでかたまる。

そして、その見解がすっかり完結したわけではなかったが、アルスュールの作った美味しいスープを味わうと、彼の考えはすっきりとまとまった。お椀にたっ

ぷり入れられたスープは、縁から溢れ出そうだった。さらに、もう一杯注がれたが、そこにはいろんな野菜がまるごと入っていた。魚のような白いポロ葱や、とろけるようなじゃがいもや、人参や、そうした野菜が口のなかに残す味のすべてが。周辺に脂肪があり中央には脂肪の少ない大きなハムが入っている。そのハムは泉水に張った氷のようにきらめいている。さらに、胡桃の葉で包まれて黄色くなったチーズは、わずかにハーブの香りがついている。男はいつそうゆっくり噛みしめている。まず、彼の腹が一杯になりはじめたからであり、また、口のなかで、舌を使ってありとあらゆる花をそなえている丘の一部を握ねまわしているように彼には思われたからである。そうして、彼の考えはすっかりできあがってきた。彼はふたたび言った。

「あんたたちはいい暮らしをしている。じつにいい暮らしだよ！」(421-422)

間もなく、3人の子どもと夫婦の一家5人が引っ越してくる。パンチュルルとアルスュールにも間もなく子どもが生まれるであろうということが知らされる。彼らにとってまさに待望の春が巡ってきたのである。

大いなる春がまた戻ってきた。

南側が口のように大きく開いた。そこから春の長くて湿った生暖かい呼吸が吹きこんできた。そうすると、花が種子のなかで身震いし、まん丸くなった大地は果実のように成熟しはじめた。

雲の艦隊が係留ロープを解いた。それは叢雲の長くて大きな行列となり、北に向かって昇っていった。その行列は長く続いた。同時に、大地が大量の雨と、目覚めた草の生命力でふくらんでいくのが感じられた。ついに、それが最後だったが、船尾を思わせるような最後の雲の下でやっと自由になった空が泡立っているのが見えた。(425-426)

そしてこの再生の物語は大団円を迎える。パンチュルルという男が人間らしくなり、アルスュールが女の幸福を掌中にし、廃墟同然だったオービニャーヌが復活し、農業が再生したのである。つまり自然が人間と折り合うようになったのである。

そこに立ちつくしている彼[パンチュルル]は、そのとき、突然、自分が大きな勝利を得たと感じた。

彼の目の前を昔の大地の映像が通りすぎていった。それはとげとげしたエニシダや小刀のような草が生えているしかめっ面をした毛深い大地だった。彼はかつての恐ろしい荒地を突如思い出した。彼もまた、荒れ狂う強い風にもてあそばれ、生命を持ったアルスュールの援助なしにはとても

刃向かうことができなかつたありとあらゆる脅威にさらされていたのであった。

彼は今自分の畑の前に立っている。茶色のビロードの大きなズボンをはいている。まるで自分が耕した畑の一部を身にまとっているようだ。身体に沿って両腕

を垂らしたまま、彼は動かない。彼は勝利をおさめた。戦いはもう終わったのだ。  
彼は大地にしっかり突き刺さっている。柱のように。(428-429、物語の結尾)

## 7. 結論

男や女の再生、農業の復活、廃墟同然だった村の復興などの物語を、ジオノはこの作品で描こうとした。

その物語を描くのにジオノは乗合馬車の雰囲気を利用した。マノスクとバノンを往復している馬車は乗客たちとともにさまざまな情報を乗せて移動するからである。その地方の住民たちの姿を伝えながら、物語は次第にパンチュルルとアルスュールに焦点を絞っていった。アルスュールが引いて歩く研ぎ師の荷車がマメッシュの誘導により、パンチュルルが住んでいるオービニャーヌに向かうことにより、彼らは遭遇することができた。ひと目で意気投合した彼らが、人間と村と農業の再生を担う。

再生の鍵を握っていたのは鍛冶屋ゴーベールの犁の刃であった。農業をはじめするには犁の刃は必要不可欠だからである。また、パンチュルルが農業に目覚めるにはアルスュールとの出会いと彼女の助言が必要だった。パンチュルルが滝に落ち流れることによってはじめてパンチュルルはアルスュールとじかに知り合うことができた。水もまた重要な役割を担っているということが了解される。今では頑丈な樹木に生長したパンチュルルの方にアルスュールが誘導されていったのは、マメッシュが演じた「樹木」のおかげである。水と樹木と犁とひとりの女の魔術によってこの再生の物語は完成することができた。

---

### 注

<sup>1</sup> Giono, *Regain*, Le livre de poche 382, 1995, p.I (Préface d'Anne-Marie Marina-Mediavilla).

<sup>2</sup> Bulletin de l'Association des Amis de Jean Giono, No 10, 1979, pp.10-11.

<sup>3</sup> Giono, *Regain*, Le livre de poche 382, 1995, p.162 (Commentaire d'Anne-Marie Marina-Mediavilla).

<sup>4</sup> Giono, *Regain*, Œuvres romanesques complètes 1, Pléiade, 1971, p.988 (Notice de Luce Ricatte).

<sup>5</sup> Giono, *Ibidem*, p.323. (これ以降、『二番草』からの引用については、この本の頁数を記すことにする。訳文はすべて拙訳を用いる。なお、引用文については文学的色彩を残すため漢数字を用いる。)

<sup>6</sup> 廃村の描写を引用しておこう。「古くなった雀蜂の巣のように崩れはててしまっているその集落は、かつてはそこに泉か井戸があったに違いないと想像させるに充分だった。なるほど泉は残っていたが、水は涸れていた。風雨に痛めつけられた屋根のない五、六軒の家や、崩れおちた鐘楼を備えた小さな教会が、人が住んでいる村の家や教会と同じように並んでいたが、そこには生命の気配はまったく消え失せてしまっていた。」(ジャン・ジオノ『木を植えた男』、山本省訳、彩流社、2006年、10-11頁)

<sup>7</sup> Giono, *Entretiens avec Jean Amrouche et Tao Amrouche*, Gallimard, 1990, p.46.

(信州大学 全学教育機構 教授)

2009年1月29日 採録決定